



# 日本語の話法の翻訳 : Seidensticker 訳 Snow Country を事例に

佐川, 寛知

---

(Citation)

国際文化学, 36:43-67

(Issue Date)

2023-03-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100479396>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479396>



## 日本語の話法の翻訳

### —Seidensticker 訳 *Snow Country* を事例に—

# Translation of Reported Discourse in Japanese: A Case Study of *Snow Country* Translated by E. Seidensticker

## Summary

There are two types of quotative construction in Japanese language: Quotative construction I and II. The former quotation has syntax that a reported clause with a quotation marker *to* specifically conveys utterance or thought content of a predicate in a reporting clause; on the other, the latter one is that utterance or thought in a reported clause with the markers *is*, *simultaneously* at the same scene, depicted alongside a predicate in a reporting clause. The language, thus, theoretically contains four types of reported discourse; however, it remains unclear how the Quotative II is translated into English. In this paper, therefore, I shall use a case study to investigate how the two quotative constructions in a Japanese novel are grammatically shifted in its translation into English, and present a descriptively accurate methodology for the analysis of Japanese reported discourse. The results show that the Japanese discourse basically tends to retain its original form even in English translation, but almost all of the data in the Quotative II are translated as an isolated form of both reporting clause and reported clause, whose structure looks like a combination of Free Direct Discourse and Free Indirect Perception. This also suggests that Edward Seidensticker, the translator, may have reproduced more overt vividness and immediacy in his translation than in the original. I conclude that the Japanese discourse is essentially translated as the isolated form, except that it has met certain formal conditions. The findings could provide researchers of contrastive studies between Japanese and English with a new direction for discourse analysis.

## キーワード

引用表現、話法、翻訳、川端康成、Edward G. Seidensticker

## I はじめに

引用とは、「所与と見なされるコトバを再現しようとする形で示すもの」である(藤田 2000: 15)。すなわち、「既にどこかで(心内も含めて)発話されたと見做した態度でコトバ

を再現すること」だと言える。また、藤田(2000: 4)は「文中の引用句『～ト』によって、引用されたコトバを導入する形の文」を「引用構文」と呼び、日本語には例(1)のような2つのタイプの引用構文が存在すると指摘している。

- (1) a. 和博が「おはよう」と言った。  
b. 和博が「おはよう」と入ってきた。<sup>1)</sup>

(藤田 2000: 29)

例(1a)は、「～ト」によって示された「おはよう」という被伝達部が、述部「言った」の具体的な内容を表す関係になっている。一方の例(1b)は、被伝達部の発話と述部の動作「入ってきた」が同一場面で同時的に共存する関係になっている。前者は「第Ⅰ類引用構文」、後者は「第Ⅱ類引用構文」と呼ばれている<sup>2)</sup>。

また、このような言語現象は、引用するときにコトバをどう再現するか、つまり「話法」と深く関わっている。話法とは、既にどこかで発話・思考されたと思われる自他のコトバを、誰の発話・思考かを明示しながら聞き手に再現するという、コトバの伝達における表現方法の一種である。一般的に、話法は更に2つのタイプに分けられる。元のコトバがそのまま引かれているらしく見える形で当該のコトバを再現して聞き手に伝える「直接話法」と、引用者の立場から(場合によっては必須となる)文法的変容を所与のコトバに施しつつ当該のコトバを再現して聞き手に伝える「間接話法」の2種類である。例えば、日本語では例(2a)が直接話法で、例(2b)が間接話法だとされる。

- (2) a. あなたのほうが間違っていますって、佐藤さんが言ってた。<sup>3)</sup>  
b. 私のほうが間違っているって、佐藤さんが言ってた。

日本語の話法の場合、「発信の意味」が被伝達節に存在しているかで直接／間接話法を判別する。発信の意味<sup>4)</sup>とは、終助詞・感動詞・間投助詞・丁寧形を作る文末詞(デス・マスなど)に託される「今ここで言葉を用いるという表現姿勢」のことである(藤田 2001: 220)。この有無によって、元のコトバをそのまま再現しているらしく見せることが可能となる。したがって、「発信の意味」の有無で上記の例を観察したとき、例(2a)では被伝達節内に「ます」が存在するため直接話法だと同定することができる。一方、例(2b)は、例(2a)にあった発信の意味が削られた形のために間接話法ということになる。また、発信の意味の有無に加えて、例(2a)では「あなた」だった人称代名詞が、例(2b)で文全体の発話者の立場に引きつけた人称代名詞である「私」に変換されている。このような直示詞の変換もまた日本語の話法の判定に貢献し得る<sup>5)</sup>。さらに、上述のⅠ・Ⅱ類という構文上の区別もあることから、理論上、日本語の話法は「Ⅰ類型引用構文による話法」と「Ⅱ類型引用構文による話法」が存在すると考えられる。

ところが、引用・話法の日英対照研究では、このような文法的な規則性による分析やⅠ・Ⅱ類の区別を等閑視する傾向にある。英語の話法と比較したとき、日本語の話法は、文法的特徴に乏しく、引用者と被引用者の社会的関係や語用論および談話上の意味機能に依存す

るため、日本語の語法を文法的な特徴だけで分析するのは困難だと考えられているからである(廣瀬 1988a, 1988b; 鎌田 2000; 山口 2009; 伊原 2011; 湯浅 2015, 2017; メイナード 2019)。その種の研究では「元話者の発話らしさの有無」で語法を分析する。

例えば、普段丁寧な言葉遣いをする「佐藤さん」という人がいたとする。佐藤さんのある発言を、第三者である「田中さん」が引用し、次のように発話した。

(3) 田中さん：だから走んなっつってんだろーがよと佐藤さんが言った。

例(3)の下線部における被伝達節は文法的には直接語法である(終助詞「ヨ」があるため)。「元話者らしさの有無」での分析とは、例えば次のような想定に基づく。「普段から丁寧な言葉遣いの佐藤さんが、上記のように言うはずがない。だから、田中さんによる変容が強く表れており、佐藤さんらしさが表れていないと考えられるため、これは間接語法になる」と分析される。

では英語の例で考えてみたときどうなるだろうか。例えば、近隣トラブルの場面で、お隣さんが直接苦情を言って来たとする。苦情を言われた側は友人に「My neighbour said to me, 'Shut up!!」と伝達した。この直接語法の文に対して、「本当はこの neighbour は、'Excuse me. Could you please refrain from making a noise at midnight?'と言ったはずだろう」とは普通考えないはずである。たとえ、この neighbour が普段から丁寧な言葉遣いの人であってもである。

確かに、小説テキストに限らず、引用されたコトバがどういう意味合いになるのかには、発話・思考における文脈が重要だろう。しかし、語法の判定方法が、文脈ありきな「元話者の発話らしさ」が被伝達節に含まれているか否かに依拠すると、直接語法なのか間接語法なのかを単に分析することまでも難しくし、その後の考察のための正確な記述をも困難にしてしまう。ここで問題なのは、日本語語法の分析となると、「どのような元発話でどのような文脈だったのか(＝語用論的解釈)」と「語法の区別・法則性(＝文法的な事実認定)」、つまり、話されたものか書かれたものか、伝達時と同じ形で存在したものかどうか、というような存在のあり方を直接／間接語法の区別と同一視してしまっているのである。この種の問題は日本語語法の翻訳に関する研究でも見られる。果たして、このような分析方法でなければ、日本語の語法やその翻訳は分析できないのだろうか。

そこで本研究では、「元話者の発話らしさの有無」や「引用者が元発話の伝達内容に変容を加えること」を語法の区別における前提とはせず、実際に書いてある言語事実のみに着目して、日本語の語法の翻訳を文法的に分析することを試みる。また、上述した藤田(2000, 2001)などでの日本語語法の考え方をもとに、『雪国』における語法の文とその英語訳を対照分析し、語法の日英翻訳の実態を捉える。更に、日本語語法の文を分析するための正確な記述方法をも提案する。そのような分析の結果、Ⅰ類型の語法は、条件によっては、原文と訳文で同一の形式を維持したり変換されたりすることはあるが、Ⅱ類型の語法の場合、原文の伝達節と被伝達節を分離した形式で訳出する手法が基本となっていることを示す。この結果を敷衍して、「ある一定の条件を満たさない限り、日本語の語法は英語では伝達節と被伝達節を分離させた文としてしか訳出されない」と結論づける。本研究の成果は、日本語の話

法研究やその翻訳の分析に新たな観点を提供し得るものと思われる。

最後に本研究の章構成について述べる。続く第II章では、日本語の話法の翻訳に関わる先行研究について概観した上で、分析上の問題点を指摘する。そして、本研究で実施した分析手順や話法の判別方法について説明し(第III章)、その結果を第IV章で示す。また、第V章ではその結果について更に考察を加え、第VI章で本研究結果のまとめと今後の研究課題について述べる。なお、以下特に断りがなければ、下線は筆者によるものである。

## II 日本語の話法とその翻訳

### 2.1 日本語の話法

日本語の話法は「引用」から派生した概念を前提として研究が行われてきた。これまでに統語論的・意味論的研究として代表的な藤田(2000)や、語用論や談話研究に基づいた研究として廣瀬(1988a, 1988b)、鎌田(2000)、メイナード(1997, 2004, 2008)など多くの研究がなされてきた。しかし、語用論や談話研究などに基づく研究では、第II類引用構文をほとんど重視してこなかった。

日本語の引用、ひいては話法を「再現」ではなく「創造」と見做す鎌田(2000)は、文体的・語用論的・談話研究的な分析の必要性を強調する<sup>6)</sup>。引用者がある所与のコトバを他者に報告する際、その引用者にとって適切な「スタイル」に変換して新たにコトバを「創造」しているからだと論じる。また、鎌田(2000: 19)は、話法を「引用」される情報を言語的に表現する方法だと捉えると『と』を必要としない表現方法もそのひとつであるため『～そうだ』などの伝聞表現もすべて、『引用』によって得られる情報をそれなりの方法で伝達する『話法』という範疇で統括できる」と説明している。このような点を加味して、鎌田は日本語の話法に「直接話法」「間接話法」「準直接話法」「準間接話法」のような段階性を認める立場をとる。そして、第II類引用構文についてはその存在を否定する。間接話法はオノマトペ性や語彙性が低く、「と言って」のような引用動詞を補わない限り、当該構文は非文法的になってしまうからだという。だが、例(4)が示すように、第II類引用構文の間接話法を成立不可と見做すのには疑問が残る。

(4) 太郎は、本当は僕が花瓶を割ったと指を差してきた。

この例(4)は、「本当は僕が花瓶を割った」という発話と「指を差す」という述部が同一場面的に共存しているため、第II類引用構文である。引用部の主体「僕」には「太郎＝僕」の解釈と「文全体の発話者＝僕」の解釈が成立する。前者の読みが正しいとすれば「直接話法」になるし、後者の読みを正しいとすれば「間接話法」となる。この点から、第II類引用構文では間接話法が成立しないという見方は妥当とは言い難い。

同様に語用論的な立場ではあるものの、上記の鎌田とは違い、廣瀬(1988a, 1988b)は日本語の話法は被伝達節が「公的表現」か「私的表現」かによって、直接／間接話法を区別することができるという。公的表現や私的表現での区別とは、「聞き手めあて」か否かということである。廣瀬曰く、聞き手めあてなら直接話法に、聞き手めあてではない、すなわち、自

己中心であれば間接話法になるという。したがって、被伝達節が聞き手への意識がある公的表現なら直接話法になり、聞き手への意識がなく自己中心である私的表現なら間接話法になるということだ。さらに、発話表現は聞き手めあてであるため公的表現に、思考表現は聞き手めあてではなく自己の内心で行われるため私的表現と見做す。このことから、日本語の発話表現は直接話法、一方、思考表現は間接話法になると廣瀬は主張する。ところが、廣瀬(1988a: 54)は思考動詞の中でも「思う」は、「心の中の擬似伝達行為を記述する用法がある」と説明し、以下の例を挙げている。

- (5) a. 太郎はふがいない自分に対して、「おい、しっかりしろよ」と思った。  
b. 太郎は弟のふがいない姿を見て、「おい、しっかりしろよ」と思った。

例(5a)は心中で自身に語りかけており、聞き手めあてではないため「間接話法」になるが、例(5b)のように心中での自己への語りかけであっても他者への語りかけなら「直接話法」になると廣瀬は分析している。このような分析の理由として、意味構造が「『XがYに対してZと思う』という三項対立」になっている場合「思う」は実質的に発話動詞になるからだとする(廣瀬 1988a: 54)。しかし、日本語の話法は被伝達節が公的表現か私的表現かで区別できるというのが、廣瀬の本来の主張だった。それにもかかわらず、例(5b)に対する分析や説明から、結局、伝達節の述部が「発話動詞か思考動詞か」で話法の区別が決まることを暗示しており、公的表現と私的表現のような語用論的分析では、話法を正確に捉えることができない傍証となってしまう。

廣瀬の分析には更に2つの問題がある。一つは、次例が示すように、本来発話や思考に関わる動詞ではないものが話法の文を構成する場合である。

- (6) 「USJ ってすごく楽しいんですよ。私は行ったことないんですけど。」  
「行ったことないんかい！」と彼は突っ込んだ。  
(7) 「行ったことないんかい！」と彼は心の中で突っ込んだ。

「突っ込む」とは、一般的には、「ある場所にモノを強引かつ素早くそして勢いよく入れること」が原義のはずで、本来は「発話動詞」でも「思考動詞」でもない。廣瀬の分析を援用した場合、どちらの動詞でもない「突っ込む」が、なぜ被伝達節を導入できて直接話法として機能できるのかを説明することができない。更に例(7)のようになると、公的／私的表現による話法の区別の説明は益々困難になる。例(6)で直接話法だと分析されたものが、「心の中」とあるだけで間接話法として扱われることになるのは不合理だからだ。廣瀬(1988a, 1988b)の捉え方では、日本語の話法の分析に合理的な説明を与えることは難しい。

二つ目に、廣瀬は、第II類引用構文のタイプの話法(例(8))があることを見落としている点でも問題がある。

- (8) いざ期待だけ満タンで あとはどうにかなるさと肩を組んだ。  
(野田洋次郎「グランドエスケープ」)

鎌田は第II類引用構文そのものを否定する立場だった。一方、廣瀬の場合、例(8)のような用例に対する説明を行っていない。公的／私的表現の区別ではII類の話法の説明が極めて困難なためだと考えられる。

このように、語用論・談話研究の観点では、第II類引用構文の存在を否定したり、その話法を説明できなかったりと、当該表現が十分に顧みられていないのが現状である。また、日本語の話法は、二つの引用構文があることを考慮すると、「I類・直接話法」「I類・間接話法」「II類・直接話法」「II類・間接話法」の2類4種があると考えられるのだが、II類型の話法にはあまり注目しないまま、日英語の話法の翻訳について研究が行われてきた。

## 2.2 話法の翻訳

日本では、話法の翻訳に関する研究は自由間接話法<sup>8)</sup>と関連づけて行なわれてきた。自由間接話法とはどのようなものなのか、もしくは日本語にはそもそも存在するのかという物語論や文体論の観点での研究や(山岡 2005, 2012; 橋本 2009, 2012; 顧 2005, 2013)、英語の自由間接話法はどのように日本語訳されてきたのか、もしくはどう日本語訳すべきかという翻訳研究の観点、また談話研究の角度からも研究が進められてきた(山口 1993, 1994, 1998; 加藤 2007; 伊原 2008, 2011, 2017)。特に、談話分析による研究では、コミュニケーションにおける参与者間の社会的関係や談話の背景となる文脈、すなわち、語用論的側面での解釈を重視する(メイナード 2004)。しかし、これらの研究は、共通して、話法を分析するにあたって記述の正確性や、第II類引用構文の話法の文を考慮に入れていない面で問題がある。特に、最大の問題は、直接／間接話法か否かを形式的に判定する過程で、語用論的解釈が介入していることである。

例えば、日英の小説を題材に対照談話分析を行なった伊原(2011)は、話法をコミュニケーションの一種と捉え、日英語の小説における話法がどのように翻訳されているかを体系的に分析している。その中で、伊原は、話法が翻訳で変換されるのは、翻訳者の好みによるものではないと論じる。また英日翻訳における日本語訳では直接話法表現が増加し、日英翻訳だと間接話法表現が英語訳で増加したとも報告している。

だが、その分析や報告には問題が2つある。伊原は、話法の変換における傾向を調査するために予備的な分析を行なった。その結果がその後の考察における前提となっているのだが、一般化するために収集した用例数が少なく、そもそも、どれくらいの数の話法の文が収集できたのかについての情報が不鮮明である。また、＜英→日＞は28例の変換があり、＜日→英＞では12例の変換があったと報告しているものの、その具体的な母数は記されていない。英日翻訳では直接話法表現が増加し、日英翻訳だと間接話法表現が増加したと果たして本当に言えるのかには依然として検討の余地がある。

2つ目は、直接話法と間接話法の定義の中で「元話者の発話らしさの有無」を導入していることである。そして、伊原の分析をよく読むと、「元話者の発話らしさ」は話法の判別には関与しないことがわかる。直接話法は(9)、間接話法は(10)のように定義づけられている(同:109)。

- (9) 引用された言葉(発話だけではなく思考も)が、伝達者とは明らかに違う元話者の発話らしさ(特徴的な言葉遣いなど)を帯びており、伝達の場合とは異なった発話場を提示する形式。
- (10) 他者の言葉を、伝達者の視点から提示する形式である。意味内容を伝えることが優先され、元話者の発話らしさは消える。

元発話の発話らしさとは、引用部における終助詞や丁寧さを表す文末詞、そして「その登場人物の話し振りを示す言葉遣い」(p.97)や「元話者の態度や感情のにじみ出た語句・口調」(p.119)だと伊原は説明する。だが、実際には、上記の定義と適合しないような分析が行われている。

- (11) [ある教員の最終講義の司会に立った M 准教授の発話]

H 先生があんたやれとおっしゃるものですから、ここに立っておりますが、私のような若輩者が、先生のご紹介をさせていただきますのは、[...]

(伊原 2011: 54 下線原文)

この発話の背景として、実際に行われた H 教授の元発話は「『M 先生、やって下さいよ。お願いします』であったそうだと伊原は説明している(ibid.)。上述の定義からすれば、「伝達者とは明らかに違う元話者の発話らしさを帯びて」おり、「伝達の場合とは異なった発話場を提示」しているとき、直接話法となるはずだった。ところが、伊原は、「元発話からは変容を遂げて」はいても、「丁寧な M 准教授の口調とは明確に異なる元発話の場を作っている」ため、当該箇所は「直接話法」だと分析する(ibid.)。すると、例(11)の「H 先生があんたやれとおっしゃる」には、「元話者の発話らしさ」が存在せず、「伝達者の視点から提示」しているのなら、直接／間接話法のどちらなのかは決まらなとするのが正しいはずである。また伊原の言う「変容」とは「レジスターやソーシャルダイクシスによる表現の調整や、情報内容を要約、削除、補充などして伝達する」(同:53)ことを意味している。とすると、「元発話からは変容を遂げ」ているというのは、やはり「元話者の発話らしさを帯びていない」とことだと解釈できる。それゆえ、この分析に基づいて伊原の述べた話法の定義を改めて解釈すると、直接話法の要件は「伝達の場合とは異なった発話場を提示する形式」で、間接話法は「他者の言葉を伝達者の視点から提示する形式」ということになる。両話法の実質的区別がなくなってしまうことがわかる。結果、伊原自身の分析が、「元話者の発話らしさ」は両話法のどちらなのかを判別するための基本要件で無いことまで含意してしまっている。

談話分析を基礎とした類似の研究にはメイナード(2019)が存在する。メイナードは、談話上の意味機能の観点から日本語のテキストとその英語翻訳されたテキストを対照しながら、日本語の話法は英語と比べて「自由で多様な表現性」(同: 229)が可能であると述べる。そして、作中人物の「語彙」や「スタイル」が表出されているかを前提に、日本語小説中の話法とその翻訳を分析している。しかしながら、メイナードの分析では、話法の具体的な定義が提示されておらず、直接話法の定義についても「誰の直接話法であるかは、語彙の選択と話のスタイル」に基づくと暗示するにとどまる(同: 231)。また、間接話法だと判断するための

具体的な定義がないため、次の例における下線部を間接話法と同定するのには説得力に欠ける(同:232)。

(12) ST:「ああ、恭平。今、どこ？」／間抜けなことを訊いてくる。予定を立て切符を渡したのは自分ではなかったのか。／「電車の中」小聲で答えた。車内でのマナーぐらいはわかっている。／「あ、そう。じゃあ、ちゃんと乗れたのね」／「うん」馬鹿にすんなよ、と思った。<sup>9)</sup> (東野圭吾『真夏の方程式』:6)

TT: “Kyohei? Where are you?” / Now, that was a stupid question. She was the one who checked the schedules and bought his ticket for him. / “On the train,” he said, keeping his voice down. / “Glad you got on all right.” / “Yeah.” *What were you expecting?* (Alexander, S. O. (trans.) *A Midsummer’s Equation*: 4)

例(12)のSTにおける下線部の被伝達節に、終助詞「ヨ」によって発信の意味が明示されているため、文法的には直接話法である。しかし、メイナード自身は例(12)のSTの下線部を間接話法だと判断し、その英語訳は「イタリック体を使用する直接話法となっていて、原作の『と思った』は反映され」ておらず、「原作の異なる引用方法は、話者がそれなりの効果を期待して選んだ」はずなのに、「英訳ではその表現意図が無視されて」といると評価する(同:232)。このような分析の根拠となるものとしては、メイナード自身による先行研究の概観でも上述の廣瀬(1988b)を一部取り上げているため、基本的には廣瀬の考え方を援用しているようである。だが、間接話法の具体的な定義については、メイナード自身は言及していないため、「語彙の選択と話のスタイル」によって直接話法か判断できると説明しているところからすれば、上記の例は直接話法だと判断されてもおかしくはないだろう。談話上の意味機能を重視するあまり、考察の一部は整合性を欠いているように思われる。

話法とその翻訳に関するこれまでの研究の問題点を整理すると、話法とその翻訳に関する2つの研究でも、元形式の変容と内容そのものの変容を話法の区別と同一視し、「話法」の分析過程と定義の間に矛盾が見られる。また、話法とその翻訳の研究では様々な観点から分析がなされてきたにもかかわらず、II類型引用構文による話法の翻訳は、I類型引用構文による話法と比べると、ほとんど注意が向けられてこなかった。同時に、II類型引用構文による話法がどのように翻訳されるのかは、依然として不明瞭のままである。

ここで、以下の3つの疑問が生じる。

(13) ①語用論・談話分析の手法でしか日本語の話法とその翻訳は分析できないのか。

②第I類・第II類の話法を区別した時、翻訳ではどう変化しているのか。

③そもそも第II類は、明示的な形式を伴った話法の文として翻訳されるのか。

上記の疑問に答えるべく、次章では、日本語の小説中の話法の文とその英訳を対照分析するための分析方法を示す。

### III 分析方法

#### 3.1 分析資料

本研究のデータは、1948年に完成版として公刊された川端康成著『雪国』を Source Text (ST)として用いる。また、Target Text (TT)として、その英語翻訳で約10年後の1957年に Tuttle Publishing より初版が公刊された Edward George Seidensticker 訳 *Snow Country* を用いる。なお、STは新潮社が2022年に新版として出版したものを使用する。新版といっても、装丁の刷新といった、本文には関わりのない軽微な変更にとどまる。英語訳の方に至っては初版以降改訂されていない。筆者は、これらの要素は本研究の分析の妨げにはならないと考えている。本研究自体が書誌学に連なるものではないからだ。

#### 3.2 分析対象

本研究では、記述と分析の正確さを期して、日本語の話を「引用句+ト／ッテ／トハ／トカ／ナンテ」形式のものに限定する。また、日本語の引用構文は「第Ⅰ類引用構文」と「第Ⅱ類引用構文」の二つがあった。したがって、日本語の話法は、「第Ⅰ類引用構文による話法」と「第Ⅱ類引用構文による話法」の二つが存在すると考えられる。そこで本研究では、第Ⅰ類引用構文での話を「Ⅰ類型話法」、第Ⅱ類引用構文での話を「Ⅱ類型話法」と呼び、日本語の話法は、①Ⅰ類・直接話法(Ⅰ・直)、②Ⅰ類・間接話法(Ⅰ・間)、③Ⅱ類・直接話法(Ⅱ・直)、④Ⅱ類・間接話法(Ⅱ・間)の計4種類で自他のコトバを明示的に表現できるものと見做した上で分析を行なう。そして、「引用句+ト」形式を「被伝達節」、その被伝達節に係る述部を含む節を「伝達節」と呼ぶことにする。

英語の話法の区分は大きく4つに区分される。①直接話法(Direct Discourse; DD)、②間接話法(Indirect Discourse; ID)、③自由直接話法(Free Direct Discourse; FDD)<sup>10)</sup>、④自由間接話法(Free Indirect Discourse; FID)の4つである。Speechではなく Discourseなのは、これが Speech と Thought を含む包括的な概念だからである。本研究では、③と④に関しては Free Direct Style (FDS)と Free Indirect Style (FIS)の術語を用いる。Style には Discourse の概念のみならず、Narrated Perception や Free Indirect Perception と呼ばれる、伝達節なしで作中人物の知覚を描出する表現をも含むからである<sup>11)</sup>。

#### 3.3 除外項目

本研究では次の4点を収集項目から除外する。①「コト引用」、②複合辞、③外の関係の連体修飾節を形成している表現、④連体修飾となっている話法表現の4つである。一つ目の「コト引用」だが、一見すると話法に含みうるのかもしれない。しかし、「コト引用」では直接話法を形成することができない。筆者は、話法を文法概念の一種と見做す立場であり、文法的対立がないところに話法の区別は生じ得ないと考える。それゆえ、これを除外した。二つ目の「複合辞」は、引用表現から派生した複合助詞や複合助動詞のことで、本来持っていた動詞という品詞性を喪失した機能語の一種である(藤田 2000, 2019b)。例えば、ある語句や話題の導入の役割を果たす「という／といえは」や、伝聞を表す「と聞く／という」などである。三つ目の「外の関係<sup>12)</sup>の連体修飾節を形成している表現」とは、例(14)のよう

な場合を指す。

(14) a. 「イギリスに留学に行きたいんです」{という／といった}相談を受けた。

b. 「イギリスに留学に行きたいんです」とのことだった。

(15) 「いつまでスマホ触ってるの」と母に叱られた私は、しぶしぶ勉強しに二階へ行った。

そして、三つ目の除外項目と関連して、例(15)のように連体修飾の中が話法表現になっているものも同様に分析の対象から外す。これらを除外するのは、分析の複雑化を避けるためである。

### 3.4 本研究の立場

日本語の話法は、被伝達節中に発信の意味が顕在であれば直接話法、非顕在と見做せば間接話法になる。ところが、日本語の話法には「直接話法・間接話法同形」という場合がある。藤田(2014: 274)では、直接／間接話法の判別方法を説明する中で、次の例(16)のような文は直接話法・間接話法同形だと補足している。

(16) 藤田「彼は『雨が降っている』と言った。」

日本語話法の判別を担ってくれる発信の意味は、音調による支えがあれば零形式でも存在しうる。したがって、藤田は、上記の例に対し、零形式の発信の意味があると見做せば直接話法になるし、本来存在していたと考えられる発信の意味が削られていると読めば間接話法になると説明している。本研究では、再現性や応用可能性の高い分析方法を提案するためにも、「直接話法・間接話法同形」という分類は立てない。発信の意味が顕在なら直接話法に、非顕在なら間接話法のどちらかに必ず分類する。

加えて、次のように意味的に照応できる例は、照応させてから分析を行なう。

(17) 「朝ごはん、テーブルの上に置いてあるから、勝手に食べといて。」

そう言って母は急いで仕事に向かった。

「そう言って」の「そう」の部分が「朝ごはん、テーブルの上に置いてあるから、勝手に食べといて。」である。本研究では、このような「そう」は「引用句+ト」を代用した形と見做し、『引用句』ト言って母は急いで仕事に向かった。」に変形させてから分析する。照応させてから分析する際、場合によっては直示詞、特に人称代名詞の変換が必須なときがある。そのような場合は、意味的に適切な形に変換させた上で分析する。

英語の物語文における話法には、Leech & Short (1981[2007])が提案する Narrative Report of Speech Acts (NRSA)と Narrative Report of Thought Acts (NRTA)が存在すると考えられている。NRSA および NRTA とは、間接話法よりも更に間接化が進んだと考えられるもので、発話・思考行為があったことを示唆するだけの文である。例えば、NRSA の例

として、‘He promised his return.’(p.259)のような文が挙げられている。しかし、本研究ではこれらは「間接話法」として一括する。文機能によっては英語の話法は、例(18)に見られるように、NRSAのような形の間接話法を基本とするものが存在するからである<sup>13)</sup>。

(18) a. She said, ‘Thank you for taking me the station.’

b. She thanked him to take her the station.

話法は「伝達節+被伝達節」で一つの文を構成している。これを前提としたとき、例(19a)は直接話法(DD)の文ではないが、例(19b)はDDの文だと言える。

(19) a. ‘How kind of you to let me come.’ Her accent sounded quite posh.

b. ‘How kind of you to let me come,’ she said politely.

例(19a)は引用符内にピリオドがあり、後続文の文頭も大文字表記になっているため、引用符で囲まれた文とその外側の文(‘Her accent...’)は分離した別々の文である。つまり、‘Her accent...’は、引用符内の発話時におけるパラ言語的情報を描写する役割に転じているのである。それゆえ、DDの文ではないと見做せるわけである。一方、例(19b)は引用符内にコンマがあることで、その中の文と外側の文(‘she said politely’)の二組で一文を構成していると見做すことができるため、DDの文と言える。しかし、実際には小説などの文章で前者のような表現は少なくない。日本語の話法が英語翻訳で例(19a)のように訳出される可能性を考慮し、STでは直接話法だった文(例えば「お招きいただき光栄です」と彼女は上品に言った。)」が、当該例文のように被伝達節と伝達節を分離させた別々の文として訳出されていた場合、すなわち、被伝達節と伝達節がそれぞれ独立した文として訳出され、鉤括弧等によって直接引用(Direct Quotation; DQ)であることは明示しつつ、後続する文がDQのパラ言語的情報を補償しているような組み合わせを、本研究では特に「DQ分離型」と呼び、これに分類する。

後述する第5章に詳しいが、このDQ分離型はFDSと形式的に一部類似している(例(20))。

(20) DQ分離: ‘How kind of you to let me come.’ Her accent sounded quite posh.

FDS: ‘How kind of you to let me come.’

したがって、DQ分離型はFDSの変種で、話法における分類としてはFDSであるため、DQ分離型を新たに項目立てる必要はないというように考えることができるかもしれない。しかし、本研究で着目しているのは、話法そのものの理論的な考究というより、日本語の話法が英語に翻訳されるにあたって、実際にはどのように訳出されているのかという実態を探ることに主眼がある。

また、例(21)のSTのような直接話法の文があったとする。

(21) ST: ①「お招きいただき光栄です」と | ②彼女は上品に言った。

DQ分離: 'How kind of you to let me come.' Her accent sounded posh.

DD: 'How kind of you to let me come,' she said politely.

FDS: 'How kind of you to let me come.'

日本語も英語も、典型的な話法の文は2つの節(伝達節と被伝達節)によって構成される。このとき、STの②の部分(例(21)の②)が削られて①の部分だけが英語で訳出されていた場合、「FDSに翻訳されている」という判断のもと、FDSに分類することになる。しかし、STの②の部分(例(21)の②)におけるDQ分離型の'Her accent sounded posh.'のように補償されているときにも、FDSに分類してよいかには疑問が残る。DQ分離型をFDSに分類するということは、例(21)における①の部分にしか着目しないことになる。話法の翻訳の分析においては、STの②の部分も含めてどのように翻訳されているのかをみるべきであって、①の部分の訳出方法のみに注目するのは正確とは言えないように思われる。それゆえ、DQ分離型は、形式的にFDSに一部類似してはいるものの、日本語の話法がどのように翻訳されるのかという実態を正確に把握するためには、FDSとは別にDQ分離型を改めて項目立てる必要があると筆者は考える。

加えて、そもそも翻訳されていない可能性も視野に入れつつ、上述した4つの分類と併せて、訳出先の話法の分類を①DD、②ID、③FDS、④FIS、⑤DQ分離、⑥非訳出の6つとする。

### 3.5 日本語の話法の判定方法

以上の観点を前提に、直接話法の判別方法として次の4点を基準とし、そのどれか一つを満たしていれば直接話法と判断する。①発信の意味が顕在、②鉤括弧が被伝達節についている、③感嘆符・疑問符・三点リーダーなどの記号や表記方法によって被伝達節の発信の意味が補われている(例(22))、④発信の意味は非明示的だが、被伝達節に零形式の発信の意味(音調的特徴)が補われていると思われる場合(例(23))の4点である。

(22) ダッッッッサとしか思わなかったわ。

(23) どうしてこんな遅くに来たと彼女は文句を言われた。

例(22)の場合、促音の複数表記によって被伝達節における発信の意味が視覚的かつ音調的に再現されている。したがって、この文が直接話法だと読み取ることができる。また、例(23)の場合も同様に、「どうしてこんな」と「文句を言われた」が被伝達節における音調的要素を容易に補うことができる。それによって、零形式の発信の意味が存在していると読めるため、後者の文も直接話法だと同定できる。なお、④は、元発話の内容の変容とは関係がなく、被伝達節内から復元し得る要素である点で、元話者の発話らしさとは異なる。

一方、間接話法の場合は、①発信の意味が生起できる環境だがそれが残っていない、②直示詞の変化、以上の2点を判別基準とする。直示詞の変化とは、例えば「私→彼(女)」や「明日→今日/昨日」のような変化を意味する。ただし、直示詞の変化があつたとしても、発信の意味が顕在であれば、直接話法と判別する。

### 3.6 分析手順

まず、ST から「引用句＋ト」形式の話を収集し、前述の判別方法に従いながら、収集した ST の話法の文を「I・直」「I・間」「II・直」「II・間」かに分類する。次に、ST や既集のデータと対照させながら TT を通読し、該当する訳文を収集する。その後、収集した TT の話を分析し、「DD・ID・FDS・FIS・DQ 分離・非訳出」かに分類する。そして、I・直が英訳でどの話法に翻訳されたか集計する。同様に、I・間や II・直／間もどのように変換されていたのか集計する。

以上の判定方法と分析手順から、本研究では、日本語の話法を「引用句＋ト」形式に限定したとき、英語ではどのように訳出されるのかを明らかにする。また、日本語の話法には I 類・II 類の区別がある点を考慮して、日本語の話法がどのように変換されて訳出されるのかを確認する。とりわけ、日本語の話法の中でも、被伝達節の発話・思考と伝達節の述部が同時場面的に共存する II 類型話法は、英語で表現することは難しいと考えられる。したがって、次の仮説が考えられる。

(24) 仮説：日本語の II 類型話法は「伝達節＋被伝達節」形式の話法で翻訳されない。

次章では、上記の分析方法で得られた分析結果とその考察を示す。

## IV 分析結果

日本語の話法の文がどのように訳出されているかを確認するために、ST でどの話法がどの程度用いられていたかを調査した。表 1 はその結果をまとめたものである。

表 1 『雪国』で収集した日本語の話法の用例数

|      | I 類 | II 類 | 合計  |
|------|-----|------|-----|
| 直接話法 | 140 | 142  | 282 |
| 間接話法 | 130 | 10   | 140 |
| 合計   | 270 | 152  | 422 |

表 1 が示す通り、全体的に DD の使用が目立つ。I 類型話法については DD と ID が近似の使用数となっている。また、特徴的な点として、II 類型話法の使用数、特に II・直の使用が極めて多いことがわかる。

II 類型話法の使用数は、その作家の文体を特徴づける指標になると考えられており(藤田 2019a)、実際、II 類の使用自体が近世や近代初期までの文学によく見られる特徴で、現代に下るにつれて減少傾向にあるとこれまでに報告されている(鶴田 2010)。したがって、II 類の使用例の多さは川端康成の文体的特徴の一つと言えるだろう。

次に、I 類型話法と II 類型話法がどのように変換され、その数の割合がどのようになっていたのかを分析した。まず I 類型話法の変換先の割合とその説明を行なったのちに、II 類型

話法の結果を示す。

以下の表2は、I 類型話法の変換先とその具体的な数とその割合を示している。

表2 I 類型話法の変換先とその割合

|     | DD            | ID            | FDS       | FIS           | DQ 分離         | 非訳出         | 合計            |
|-----|---------------|---------------|-----------|---------------|---------------|-------------|---------------|
| I・直 | 38<br>(26.8%) | 22<br>(16.2%) | 0<br>(0%) | 26<br>(19.0%) | 54<br>(38.0%) | 0<br>(0%)   | 140<br>(100%) |
| I・間 | 1<br>(0.8%)   | 68<br>(52.7%) | 0<br>(0%) | 34<br>(26.4%) | 25<br>(18.6%) | 2<br>(1.6%) | 130<br>(100%) |
| 合計  | 39<br>(14.4%) | 90<br>(33.3%) | 0<br>(0%) | 60<br>(22.2%) | 79<br>(29.2%) | 2<br>(0.9%) | 270<br>(100%) |

伊原(2011)では、日本語の直接話法は英語では間接話法表現として訳出される傾向があると報告しているが、本調査ではそのような傾向はみられなかった。むしろ、DD から DQ 分離型の訳出方法の方が多く、また、DD を日英で維持していることの方が「直→間」への変換よりも多い。一方で、日本語の I・間は、英語でも ID を維持しやすい傾向にあるようである。英語の話法の場合、伝達節の動詞が発話動詞か思考動詞である必要があることを考慮に入れて、ST の述部に何らかの傾向がないか詳細に分析した。

ST の伝達節における述部は大きく 6 パターンに分類することができた。①発話・発声系(「言う」「笑う」「声を出す」「口籠る」など)、②質問・依頼系(「聞く」「尋ねる」)、③思考系(「考える」「思われる」「高を括る」「思い出す」など)、④感情系(「心配だ」「心待ちにする」「笑いが込み上がる」「気色ばむ」など)、⑤知覚系(「聞こえる」「独り言のようだ」「わかる」など)、⑥その他(「吐き気を催す」「書いてある」など)の 6 つである。この分類で表2の結果をまとめ直したものが、表3と表4である。横のラベルが述部の分類を、縦のラベルが ST の変換先の話法を表している。なお、II 類型話法の伝達節における述部の分析はしなかった。第 II 類引用構文の場合、被伝達節に係る述部を自由にとることが可能で法則性がないためである。

表3 I・直の伝達節で使用されていた述部と英訳における変換先

|       | 発話<br>発声系 | 質問<br>依頼系 | 思考系 | 感情系 | 知覚系 | その他 | 合計 |
|-------|-----------|-----------|-----|-----|-----|-----|----|
| DD    | 31        | 4         | 0   | 0   | 1   | 2   | 38 |
| ID    | 6         | 0         | 13  | 3   | 0   | 0   | 22 |
| FDS   | 0         | 0         | 0   | 0   | 0   | 0   | 0  |
| FIS   | 8         | 0         | 15  | 3   | 0   | 0   | 26 |
| DQ 分離 | 37        | 0         | 4   | 9   | 2   | 2   | 54 |
| 非訳出   | 0         | 0         | 0   | 0   | 0   | 0   | 0  |

|    |    |   |    |    |   |   |     |
|----|----|---|----|----|---|---|-----|
| 合計 | 82 | 4 | 32 | 15 | 3 | 4 | 140 |
|----|----|---|----|----|---|---|-----|

この分析により次の3点が明らかになった。①表3からSTの伝達節が発話・発声系の述部をもつ「直→直」や「直→DQ分離」というパターンをとりやすいこと、②実際に話法の変換が起こるのはSTの伝達節が思考系の述部を取ったときであること、③「直→FIS」の場合、被伝達節内は「鉤括弧無し+顕在的な発信の意味」というパターンをとり、特に「疑問を表す終助詞「カ」」が被伝達節にあるとFISに変換されていたことである。

①について更に詳しく収集した用例を見てみたところ、「直→直」と「直→DQ分離」のそれぞれで、ある傾向が見られた。まず、前者の場合、例(25)の下線部のように31例全てが「鉤括弧付きの被伝達節+発話・発声系の述部の伝達節」というパターンをとっていた。

(25) ST: 一時間ほどすると、また長い廊下にみだれた足音で、あちこちに突きあたったり倒れたりして来るらしく、／「島村さあん、島村さあん。」と、甲高く叫んだ。(『雪国』: 32)

TT: An hour or so later, he heard uneven steps coming down the long hall. She was weaving from side to side, he could tell, running into a wall, stumbling to the floor. / 'Shimamura, Shimamura,' she called in a high voice. (*Snow Country*: 32-33)

一方、例(26)の下線部のように、発話様態動詞でもカバーできないほど、様態の描写や発話そのものが伝達節以降も続く場合、「直→DQ分離」という訳出パターンとなっていた。

(26) ST: 「そう、大丈夫。今は農家が暇だから、こんなに早く出歩く人はいないわ。でも山へ行く人があるかしら。」と、ひとりごとを言いながら、女は結びかかった帯をひきずって歩き、「今の五時の下りでお客がなかったわね。宿の人はまだまだ起きないわ。」／帯を結び終わってから、女は立ったり坐ったり、そうしてまた窓の方ばかり見て歩き廻った。(『雪国』: 46)

TT: 'But it's all right. The farmers aren't busy this time of the year, and no one will be out so early. But do you suppose someone might be going out into the mountains?' She talked on to herself, and she walked about trailing the end of the half-tied obi. 'There were no guests on the five-o'clock from Tokyo. None of the inn people will be up for a long while yet.' / Even when she had finished tying the obi, she stood up and sat down and stood up again, and wandered about the room with her eye on the window. (*Snow Country*: 47)

このような例の場合、STの引用部は作中人物視点、伝達節の視点は語り手の視点、そして鉤括弧付きの発話の引用によって再び作中人物視点に変化する。一文中で視点が何度も変化しているのである。しかし、TTではSTの被伝達節と伝達節を切り離し、別々の文とし

て訳出されている。これは英語が同一文内の視点を維持するのを基本とするためと考えられる。また、STの一文自体がかなり長い点もTTの産出に影響を与え、結果として「直→DQ分離」という方略を取らざるを得なかったのだと考えられる。

次に、話法の変換が起こるのは、STで伝達節の述部が思考系の動詞をとっているときだった。STの伝達節が思考系の述部だったとき、被伝達節に鉤括弧が付いている例は一つもなかった。この点、伝達節の述部が発話系のものだった場合と対照的である。興味深いのは、STの伝達節の述部が思考系のものだと、IDのみならず、それと類縁の表現であるFISとしても訳出されることが同じくらい多いことである。

一方、「直→FIS」のパターンのとき、伝達節の述部は思考系で、被伝達節には鉤括弧が付いていなかった。これはIDに変換されるとき条件と同じである。両者の訳し分けはどのようななされていたのか。それは、被伝達節における発信の意味の有無であった。発信の意味が顕在だったとき、IDではなくFISとして訳出する傾向があったのである。また、文に疑問の機能をもたせたり、詠嘆や納得などを表現する終助詞「カ」が当該節に含まれていると、「直→FIS」という訳出パターンの傾向にあった(例(27))。

(27) ST: <sup>(1)</sup>十九や二十の田舎芸者の三味線なんか高が知れてるはずだ、<sup>(2)</sup>お座敷だのにまるで舞台のように弾いてるじゃないか、<sup>(3)</sup>おれ自身の山の感傷に過ぎんなどと、島村は思ってみようとしたし、駒子はわざと文句を棒読みしたり、ここはゆっくり、面倒臭いと言って飛ばしたりしたが、<sup>(4-1)</sup>だんだん憑かれたように声も高まって来ると、<sup>(5)</sup>撥の音がどこまで強く冴えるのかと、<sup>(4-2)</sup>島村は怖くなって、虚勢を張るように肘枕で転がった。(『雪国』: 69-70)

TT: <sup>(1)</sup>She [Komako] was a mountain geisha, not yet twenty, and she could hardly be as good as all that, he [Shimamura] told himself. <sup>(2)</sup>And in spite of the fact that she was in a small room, was she not slamming away at the instrument as though she were on the stage? <sup>(3)</sup>He was being carried away by his own mountain emotionalism. Komako purposely read the words in a monotone, now slowing down and now jumping over a passage that was too much trouble; but gradually she seemed to fall into a spell. <sup>(4-1)</sup>As her voice rose higher, <sup>(4-2)</sup>Shimamura began to feel a little frightened. <sup>(5)</sup>How far would that strong, sure touch take him? He rolled over and pillowed his head on an arm, as if in bored indifference. (Snow Country: 71)

例(27)のSTにおける下線部(1)-(3)のように、被伝達節に詠嘆や自問を表す終助詞「カ」や「おれ」という発信の意味が内在した話法の一文である。しかし、TTの下線部(1)では、「十九や二十の田舎芸者の三味線なんか高が知れてるはずだ」が挿入節を伴ったFISとして明示的に訳出されている。「お座敷だのにまるで舞台のように弾いてるじゃないか」は、下線部(2)のように伝達節を伴わない疑問文として地の文に訳出されている。そして、下線部(3)は、「He」という人称代名詞で下線部(1)の伝達節の主体と同一主体であることを示しつつ、過去進行形を用いたFISとして訳出されている。このように、STの被伝達節に発信の意味が

含まれているものの、鉤括弧がなく、伝達節が思考系の述部になっていると、STの文を細分化しながらもFISとして訳出する傾向があった。また、下線部(4)-(5)のように、STのその機能に関わりなく、詠嘆や自問を表す終助詞「カ」が被伝達節にあると、場合によっては、文の順序を組み替えながらFISとして訳出する傾向があった。FISとして訳出されるにあたって、STの被伝達節における詠嘆や自問という機能は重要な役割を果たすようだ。

続いて、I・間の伝達節の述部の分析結果を示す表4について述べる。

表4 I・間の伝達節で使用されていた述部と英訳における変換先

|      | 発話<br>発声系 | 質問<br>依頼系 | 思考系 | 感情系 | 知覚系 | その他 | 合計  |
|------|-----------|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|
| DD   | 1         | 0         | 0   | 0   | 0   | 0   | 1   |
| ID   | 22        | 3         | 33  | 0   | 8   | 2   | 68  |
| FDS  | 0         | 0         | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   |
| FIS  | 20        | 0         | 10  | 0   | 3   | 1   | 34  |
| DQ分離 | 2         | 0         | 19  | 3   | 1   | 0   | 25  |
| 非訳出  | 0         | 0         | 1   | 0   | 1   | 0   | 2   |
| 合計   | 45        | 3         | 63  | 3   | 13  | 3   | 130 |

この結果の中で顕著なのは、STで間接話法の場合は、直接話法の場合と異なり、伝達節の述部が「発話系」「思考系」に関係なく、「間→間」を維持する傾向があることである。仮に変更される場合であっても、IDと類縁のFISへの変更にとどまっている。

また、伝達節の述部が「発話系」で「間→FIS」の場合、STは「伝聞」としても解釈し得るようなものだった。

(28) ST: 駒子にそういう人のあるのを島村は初めて知った。十七の年から五年続いていると言う。島村が前から訝しく思っていた、駒子の無知で無警戒なのはそれで分かった。(『雪国』: 102-3)

TT: That was the first Shimamura had heard of the 'one man' in Komako's life. She had known him since she was sixteen, she said. Shimamura thought he understood now the lack of caution that had at first so puzzled him. (*Snow Country*: 106)

一般的に、非過去形の「いう」は、その主体が非明示的になっている場合、伝聞として機能する。しかし、例(28)の下線部のように漢字表記すると、普通、「言う」は伝聞よりも本来の動詞としての意味での読み方が優勢になる。一方、TTでは伝達節が文末に挿入されていることで、FISとして読み手の認知過程に修正を強いている。

更に、STでは「と言う」が何度も用いられるのに対し、TTでは一度しか使っていない例もあった(例(29))。

(29) ST: 月は百円稼げばいいのだと言った。先月一番少い人で三百本の六十円だと言った。駒子は座敷数が九十幾つで一番多く、一座敷で一本が自分の貰いになるので、主人には損だが、どんどん廻るのだと言った。借金を殖やして年期の延びた人は、この温泉場には一人もないと言った。(『雪国』: 104)

TT: It was enough if she made a hundred yen a month, she said. The month before, the least busy of the year, she had made sixty yen. She had had some ninety parties, more than any other geisha. She received a fixed amount for herself from each party, and the larger number of parties therefore meant relatively more for her and less for the man to whom she was indentured. But she moved busily from one to another as the spirit took her. There was not a single geisha at this hot spring who lost money and had to extend her contract. (*Snow Country*: 107-8)

このような差異は日英における「情報のなわばり」の違いを反映している。日本語は発言内容や思考内容を伝達する際に、その情報元となった人物や伝聞であることを示す言葉を常に明示する必要があるが、英語は一度情報元や伝聞だと分かる言葉を示せば以降は省略できる(神尾 1990, 2002)。そのため、視点維持装置として働くとされる挿入節を一度使うのみで、それ以降の文では伝達節を明示していない。その結果、ST では間接話法だった文が TT で FIS として訳出されている。

次に、II 類型話法の訳出傾向について述べる。その結果を表 5 として以下に示す。

表 5 II 類型話法の変換先とその割合

|      | DD          | ID           | FDS       | FIS         | DQ 分離          | 非訳出         | 合計            |
|------|-------------|--------------|-----------|-------------|----------------|-------------|---------------|
| II・直 | 7<br>(4.9%) | 5<br>(16.2%) | 0<br>(0%) | 5<br>(3.5%) | 124<br>(87.3%) | 1<br>(0.7%) | 142<br>(100%) |
| II・間 | 1<br>(10%)  | 2<br>(20%)   | 0<br>(0%) | 1<br>(10%)  | 6<br>(60%)     | 0<br>(0%)   | 10<br>(100%)  |
| 合計   | 8<br>(5.2%) | 7<br>(4.6%)  | 0<br>(0%) | 6<br>(4.0%) | 130<br>(85.5%) | 1<br>(0.7%) | 152<br>(100%) |

分析に先立って、筆者は「日本語の II 類型話法は「伝達節+被伝達節」形式の話法で翻訳されない」という仮説を提示した。すなわち DQ 分離型で訳出されるのではないかとこの予測を立てたのである。

その結果、予測通り、II 類型話法はほぼ DQ 分離型で訳出されていた。特に顕著なのは、II・直の全 142 例のうち、9 割に迫る 124 例が DQ 分離型で訳出されていた点である。また、DQ 分離型の訳では、ST と同じように、文の順序として必ず被伝達節が伝達節よりも先行する配置になっていた。これらの事実から、II 類型話法の訳出方法は DQ 分離型を基

本としていると言える。また、このような結果となったのは、日本語の「引用句＋ト」の性質が基本的には副詞であり(藤田 2000)、どんな述部にも自由に係ることができるからだと考えられる。

最後に、表 2 と表 5 の結果をまとめたものを表 6 に示す。

表 6 I・II 類話法の変換先とその割合

|      | DD            | ID            | FDS       | FIS           | DQ 分離          | 非訳出         | 合計            |
|------|---------------|---------------|-----------|---------------|----------------|-------------|---------------|
| I・直  | 38<br>(26.8%) | 22<br>(16.2%) | 0<br>(0%) | 26<br>(19.0%) | 54<br>(38.0%)  | 0<br>(0%)   | 140<br>(100%) |
| I・間  | 1<br>(0.8%)   | 68<br>(52.7%) | 0<br>(0%) | 34<br>(26.4%) | 25<br>(18.6%)  | 2<br>(1.6%) | 130<br>(100%) |
| II・直 | 7<br>(4.9%)   | 5<br>(16.2%)  | 0<br>(0%) | 5<br>(3.5%)   | 124<br>(87.3%) | 1<br>(0.7%) | 142<br>(100%) |
| II・間 | 1<br>(10%)    | 2<br>(20%)    | 0<br>(0%) | 1<br>(10%)    | 6<br>(60%)     | 0<br>(0%)   | 10<br>(100%)  |
| 合計   | 47<br>(11.2%) | 97<br>(22.9%) | 0<br>(0%) | 66<br>(15.6%) | 209<br>(49.5%) | 3<br>(0.8%) | 422<br>(100%) |

このようにしてまとめると、DQ 分離型での訳出が全 422 例中 209 例(約 50%)と、傑出して多いことがわかる。また、このような結果になったのは、II・直の 9 割にも迫る数が DQ 分離型で訳出されているためなのだが、I・直の訳出方法でも DQ 分離型が多いことも影響している。したがって、分析の結果、日本語の話法の訳出方法は、DQ 分離型を基本とすることが示唆される。特に、II・直については、DQ 分離型が基本的な訳出方法だと言える。

以上の分析結果をまとめると、次の 3 点になる。①英語の話法では、鉤括弧の有無が話法の認識に大きく関与しているのかもしれないということである。実際、「鉤括弧付きの被伝達節＋発話・発声系の述部」のとき必ず DS になっている一方、「鉤括弧なしの被伝達節＋思考系の述部」のときは ID として訳出されていた点からも裏付けられる。②話法の変換自体は、日本語の伝達節における「述部」が大きな影響を与えているようである。そして、③日本語の話法は、英語で間接話法として訳出されるというよりも、DQ 分離型での翻訳を基本とする可能性を示唆している。これら 3 点から、「ある一定の条件を満たさない限り、日本語の話法は英語では被伝達節と伝達節を分離させた文としてしか訳出されない」と結論づけることができる。

## V 考察

これまでの話法やその翻訳の研究では、「元話者の発話らしさ」という元発話に対する文脈に大きく依存した分析が基本となっていた。しかし、本研究では、話法の正確な記述と分析をするための方法を提示し、実際に『雪国』とその英語訳 *Snow Country* を資料に事例分析を行なった。その結果、日本語の話法は比較元的話法を維持したまま訳出されること

が明らかになった。また、それ以上に興味深いのは、日本語の話法は **DQ** 分離型として訳出される方が多いと分かったことである。特に、**II** 類型話法に至ってはほぼ全てが **DQ** 分離型で訳出されることが分かった。では、なぜ日本語の話法は **DQ** 分離型で訳出されることの方が多かったのだろうか。それは、日本語の被伝達節の品詞性が「副詞」を基本とするからだと考えられる。

藤田(2000)によれば、日本語の「引用句＋ト」は伝達節に対して基本的には副詞として機能するため、他の必須成分と共存できるという。しかし、動詞の格成分として機能するものが他に存在しないとき、その格成分を埋めるため、結果として必須成分として機能し、「引用句＋ト」と必須成分が共存できるのだという。したがって、第 **II** 類のような引用構文が形成できるし、以下の例のような表現が可能となる(藤田 2000 参考)。

- (30) a. ?少女は告白した。  
 b. 少女は友人の持ち物を盗んだことを告白した。  
 c. 「確かに私がやりました」と少女は告白した。  
 d. 「確かに私がやりました」と少女は友人の持ち物を盗んだことを告白した。

例(30a)のように、「告白した」だけでは「何を？」や「誰に？」という部分を補わなければ、やや不自然になる。実際、例(30b)のように補充すると自然になる。一方、例(30c)のように「引用句＋ト」という被伝達節は、「告白する」という発話・発声に関わる述部の具体的内容を補充することもできる。さらに、例(30b)と(30c)を合成した(30d)も作ることが可能である。この場合、「引用句＋ト」が「友人の持ち物を盗んだこと」という「ヲ格」の必須成分と共存しながら、「告白した」ことを更に具体的に補充する副詞成分として機能している。したがって、例(30b)のように「引用句＋ト」の部分を省略できることと併せて、日本語の「引用句＋ト」すなわち「被伝達節」は副詞という品詞性のために、例(30d)のような文を構成することができるのである。その結果、発話・思考を表す被伝達節と、それが係る動作・状態を表す述部とが同時場面的に共存する第 **II** 類引用構文の文を作ることができるのである。また、当該引用構文で被伝達節に係る述部は、発話・思考を意味する動詞ではない点も特徴であり、これらが **DQ** 分離型の訳出方法を引き起こした原因と考えられる。伝達節の述部が基本的には発話動詞か思考動詞でなければ成立しにくい英語の話法では、**II** 類型話法を **DQ** 分離型で表現するほかない。ある意味、翻訳者は **II** 類型話法を **DQ** 分離型で翻訳させられたと言える。

ところで、この **DQ** 分離型だが、形式的には自由直接話法(FDS)に酷似している。FDS とは、**DD** から伝達節を取り除いた形式をとることで、読み手は作中人物から直接話し掛けられているように感じるができたり、作中人物の内心を直接窺い知ることができるようになる。そのため、読み手に臨場感を与えたり、作中人物同士での小気味良い会話を表現することができる修辞技法として知られている(Leech & Short 1981 [2007]; Simpson 1993; 山口 2009)。また、Simpson (1993: 20)によれば、FDS には自由度に段階性が認められるとして次の例を示している。

(31) a. I know these tricks of yours! she said.

b. 'I know these tricks of yours!'

c. I know these tricks of yours!

Simpson は更に例(31c)に近づくほど自由度が増すと説明している。そして、本研究では、以下の例を DQ 分離型の訳出方法と見做して分析を行った。

(19)a. 'How kind of you to let me come.' Her accent sounded quite posh.

(31b)のFDSの文と(19a)を比較すると、確かに形式的にかなり類似していることが分かる。DQ 分離型は FDS と一部形式的に類似してはいるが、厳密には、パラ言語的情報を描写する文と FDS という 2 文によって構成されている。つまり、日本語の II 類型話法は、英語では FDS とパラ言語的情報を示す平叙文の一組、本研究でいうところの DQ 分離型として訳出されやすいという見方ができる。また、そのパラ言語的情報を示す後続文は、前文における直接引用部に後続するという文脈上の特徴から、当該発話の受け手となる人物の視点を經由している。そのような文における知覚描写は、当該人物の視点を反映していると考えられる。とすると、伝達節なしでその人物の知覚を描出していることから、この後続文は事実上の FIP (Free Indirect Perception) として機能していると言える。ただし、場合によっては、'She talked...'のように通常とは異なる形で伝達者を明示することがある(例(26))。これらの点も加味すると、DQ 分離型は「FDS+FIP」や「FDS+パラ言語的情報の文(FIP ではない文)」という組み合わせの表現形式と言え、これが II 類型話法の訳出における基本形式となっていると考えられる。さらに、I・直の訳出方法でも DQ 分離型が頻出していたことから、日本語の話法は英語では DQ 分離型で訳出することが基本となっている可能性を指摘できる。日本語の話法は英語で ID として訳出される傾向にあるという考え方には、更なる検討の余地があるとも指摘できる。

FDS が読み手に与える文体的効果の側面から更に述べると、「過剰に臨場感が創出されている可能性が考えられる。事実、I 類型話法における DQ 分離型への訳出数は 79 例、II 類型話法の訳出数は 130 例と、全 422 例中 209 例(49.5%)が DQ 分離型で訳出されていたのだ。その一方、日本語小説がそれだけ「作中世界の現場性」すなわち「臨場感」を多く含んでいるからだとも考えることができる。このような結果は、翻訳者の好みや文体的特徴の反映を示唆しているのかもしれない。

本研究の分析結果は、Seidensticker 個人の特徴、すなわち、翻訳者の文体の反映と見る向きと、川端康成の文体を英語でも再現した、もしくはそれを試みた結果という向きの両方の可能性が考えられる。実際、分析結果から、II 類型話法の訳出方法が「FDS+FIP」や「FDS+パラ言語的情報の文(FIP ではない文)」という形式を併せ持った DQ 分離型になるという一般性を示唆している。そして、翻訳者の文体が反映されていると見るか、それとも普遍的事実と見るかは、更なる検証を要する。例えば、本研究における分析資料と同じくらいの分量の作品、それも別の作家・別の翻訳者によるものと比較検証する必要がある。それによって、翻訳者の文体か否かを解明することができると考えられる。

また、本研究では、分析における記述の正確性や今後の分析への応用可能性を期すために、「引用句＋ト」による話法の文のみを分析対象にした。そのため、本研究における分析方法は分析対象に制限を加えて分析していることになる。連体修飾しているタイプの話法の文や「コト引用」などにも適用できるかは、今後の更なる検討や改善の余地がある。

## VI おわりに

本研究では、日本語の話法はⅠ類型・Ⅱ類型に限らず、直接／間接話法として英語で訳出するよりも、「FDS+FIP」や「FDS+パラ言語的情報(FIP ではない文)」という組み合わせの表現形式である DQ 分離型のような手法で訳出されることのほうが多いことを示した。また、「鉤括弧付きの被伝達節＋発話・発声系の述部の伝達節」のように、日本語の話法は特定の形式的な条件が揃うと同一の話法として維持されるか、もしくは変換されて訳出されることも明らかにした。本研究の分析結果は、日本語の話法は英語に翻訳されるとき、ID への変換が起りやすいというよりも、DQ 分離型として翻訳される可能性が高いこと、そして日本語小説は過剰に臨場感を創出させられている可能性をも示唆している。同時に、本研究は、日本語小説における話法の分析に、引用者と被引用者の社会的関係や元発話の変容における文脈等を前提にせずとも正確な分析が可能だと示すこととなった。

本研究の知見は川端康成の文体的特徴の深い理解につながると同時に、本研究における話法の判定と分析方法は、今後、日本語小説の話法の研究や日英語の話法の対照分析のための有望な手段となりうるだろう。その一方で、本研究結果が原著者の文体を反映するためにとられた方略なのかを確かめるために、同程度の分量の諸作品と本研究結果を比較する必要がある。それによって、今回の分析結果が、翻訳者の翻訳方略や文体に関する傾向なのか、それとも一般性のある結果だったのかを解明することができるはずである。今後は、分析対象から外した「連体修飾節内の話法」や英日翻訳における話法の訳出傾向についても更に調査する必要があるだろう。

(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程)

## 注

① 一見すると、例(1b)は「と言って」などが省略された形に見えるかもしれないが、そのように捉えるのは間違いである。一般的に、省略という文法現象とは次の例の場合を指す。

(ア)「雨、降ってる？」

「うーん、まだ(雨は降ってはいない)かな。」

このように、前文脈が存在しているおかげで丸括弧の部分が復元可能なときのことを「省略」と呼ぶはずである。第Ⅱ類引用構文は前文脈なしでも現れる。単に、例(1b)の場合、(1a)が先立って存在するために省略されているように見えているだけなのである。

② 第Ⅰ・Ⅱ類引用構文における区別は、被引用句に大きく左右される。例えば、次例のように、「笑った」に係る被引用句次第で第Ⅰ類引用構文となったり、第Ⅱ類引用構文になったりする。最終的な判断は分析者の方針に左右される。このような事実は、藤田(2000)でも指摘されている。本研究では被伝達節の内容と伝達節の関係を考慮して用例は収集された。

(ア) a. 「おはよう」と彼女は笑った。(II類)

b. 「あははは、あー、おかしい」と彼女は笑った。(I類)

3) 本研究では、引用標識として「ト」以外に「ッテ」「トハ」「トカ」「ナンテ」も認める。

4) 藤田(2000)では「伝達のムード」と呼んでいるが、藤田(2001)で「発信の意味」と改めているため、本研究ではこちらを採用した。なお、疑問文を作る終助詞「カ」は発信の意味から除外する。この終助詞は、他のそれとは違って、疑問という文機能を決定づけるのに必須の要素だからだ。しかし「カナ」や「カシラ」などは発信の意味と見做す。「カ」と同じような機能ではあるが、明らかに質的に異なるためである。

5) 例(2)の例の場合、被伝達節が指す「私」には二つの解釈が存在する。「私＝佐藤さん」の場合と「私＝文全体の発話者」の可能性である。しかし、これに発信の意味を付与すれば、「私＝佐藤さん」の解釈しか成り立たなくなる。

(イ) 私のほうが間違っている{ね／よ／な／います／かしら}と佐藤さんが言った。

このことから、日本語話法の判別で文法的に必須なのは「発信の意味」で、人称代名詞などの直示詞の変換はあくまでも十分条件にすぎないのである。

6) 藤田(2000)は、統語論の問題と語用論の問題を区別すべきだと強く主張し、話し手による変容・非変容がなぜ起こるのかについては「話し手投写」という概念で説明している。詳しくは、藤田(2000)参照のこと。

7) 鎌田(2000: 17)は「引用」を「ある発話・思考の場で成立した(あるいは、成立するであろう)発話・思考を新たな発話・思考の場に取り込む行為」と定義づけている。

8) 自由間接話法(Free Indirect Discourse)とは、意味的には、直接話法(DD)による元発話者らしさと間接話法(ID)の特徴を併せ持つとされる一方、被伝達節をもたないという形態的特徴をもち、物語などの文章で見られる表現技法のことである。

(ウ) FID: He would return there to see her again the following day

ID: He said that he would return there to see her the following day.

(Leech & Short (1981[2007]: 255-61 参考)

9) 下線はメイナードによるもの。TTの斜体もまたメイナードによる。

10) Free Direct Discourse(自由直接話法)とは、物語などの文章で見られる表現技法の一つで、DDにおける伝達節や引用符を取り除いた形式で、発話者による発話をそのまま描く。

(エ) FDD: I'll come back here to see you again tomorrow.

DS: He said, 'I'll come back here to see you again tomorrow.'

(Leech & Short (1981[2007]: 255-61 参考)

11) Leech & Short (1981[2007]), Fludernik (1993), Bray (2003), Semino & Short (2004), Sotirova (2013)などを参考。なお、Free Indirect Perception (FIP)とは、以下の例のように、伝達節なしで作中人物の知覚を描出する表現技法のことである。Narrated Perception も同じ概念を指す(Brinton 1980; Pallarés-García 2012; Rundquist 2018などを参考)。

(オ) a. He saw that no one was in the classroom yet.

b. No one was in the classroom yet.

12) 寺村(1992)の用語。連体修飾節の係り先となっている底の名詞を格成分として同じ内容への書き換えができない連体修飾のことである。詳しくは当該研究を参照のこと。

13) 他にも、直接話法で被伝達節が「命令」「勧誘」などの文を間接話法に変換させる場合、NRSAのような形になる。

## 一次文献

Kawabata, Y. (1957) *Snow Country* (tran. E Seidensticker). New York: Tuttle Publishing.  
川端康成 (2022) 『雪国』 東京: 新潮社.

## 参考文献

- Bray, J. (2003) *The Epistolary Novel: Representations of Consciousness*. London: Routledge.
- Brinton, L. (1980) 'Represented perception': A study in narrative style. *Poetics*, 9(4), 363–381.
- Fludernik, M. (1993) *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The Linguistic Representation of Speech and Consciousness*. London: Routledge.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 大阪: 和泉書院.
- 藤田保幸 (2001) 引用論から見た「伝達のムード」の位置づけ. 前田富祺先生退官記念論集刊行会 (編) 『日本語日本文学の研究: 前田富祺先生退官記念論集』 天津: 前田富祺先生退官記念論集刊行会, 213–224.
- 藤田保幸 (2014) 『引用研究史論—文法論としての日本語引用表現研究の展開をめぐって—』 大阪: 和泉書院.
- 藤田保幸 (2019a) 引用と文体. 『文学・語学』 (226), 144–156.
- 藤田保幸 (2019b) 『複合助詞の研究』 大阪: 和泉書院.
- 橋本陽介 (2009) 「物語世界の客体化」からみる自由間接話法の言語間比較. 『藝文研究』 (96), 96(181)–112(165).
- 橋本陽介 (2012) 日本語の「オーバーラップした語り」について—話法の比較詩学—. 『藝文研究』 (102), 165–181.
- 廣瀬幸生 (1988a) 私的表現と公的表現. 『文藝言語研究 言語篇』 (14), 37–56.
- 廣瀬幸生 (1988b) 言語表現のレベルと話法. 『日本語学 7』 (9月号), 4–13.
- 伊原紀子 (2008) 日・英小説の語りに表れる「声」: 自由間接話法とその翻訳. 『社会言語科学』 11(1), 151–163.
- 伊原紀子 (2011) 『翻訳と話法—語りの声を聞く—』 京都: 松籟社.
- 伊原紀子 (2017) コミュニケーション・ストラテジーとしての想定引用. 『社会言語科学』 19(2), 27–42.
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』 東京: ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 東京: 大修館書店.
- 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』 東京: 大修館書店.
- 加藤久佳 (2007) 独英日間翻訳における「視点」の考察: Momo を題材に. 『通訳研究』 (7), 117–146.
- 顧那 (2005) 引用文の伝達部における視点と話法. 『ことばの科学』 (18), 29–46.

- 顧那 (2013) 一人称小説における自由間接話法と自由直接話法—日中比較の視点から—. 表現学会 (編)『言語表現学叢書』 大阪: 清文堂出版, 410–419.
- Leech, G. & Short, M. (1981[2007]) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose. 2nd ed.* London: Pearson Education Limited.
- メイナード, 泉子・K. (1997)『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』東京: くろしお出版.
- メイナード, 泉子・K. (2004)『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究—』東京: くろしお出版.
- メイナード, 泉子・K. (2008)『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造—』東京: くろしお出版.
- メイナード, 泉子・K. (2019)『日本語本質論—翻訳テキスト分析が映し出す姿—』東京: 明治書院.
- Pallarés-García, E. (2012) Narrated perception revisited: The case of Jane Austen's Emma. *Language and Literature*, 21(2), 170–188.
- Rundquist, E. (2018) *Free Indirect Style in Modernism: Representations of Consciousness.* Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Semino, E. & Short, M. (2004) *Corpus Stylistics: Speech, Writing and Thought Presentation in a Corpus of English Writing.* London: Routledge.
- Simpson, P. (1993) *Language, Ideology and Point of View.* London: Routledge.
- Sotirova, V. (2013) *Consciousness in Modernist Fiction: A Stylistic Study.* Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- 寺村秀夫 (1992)『寺村秀夫論文集 I』 東京: くろしお出版.
- 鶴田洋子 (2010) 小説における引用構文.『21世紀アジア学会紀要』(8), 21–32.
- 山岡實 (2005)『「語り」の記号論—日英比較物語文分析〈増補版〉』東京: 松柏社.
- 山岡實 (2012)『文学と言語学のはざままで—日英物語の言語表現分析—』東京: 開拓社.
- 山口治彦 (2009)『明晰な引用, しなやかな引用—話法の日英対照研究』東京: くろしお出版.
- 山口美知代 (1993) 英語自由間接話法の日本語訳: 事例研究と今後の研究への問題提起.『京都府立大学学術報告 人文』(45), 15–36.
- 山口美知代 (1994) 英語自由間接話法の日本語訳に引用符が与える影響: Jane Austen の小説と翻訳テキストの比較分析.『京都府立大学学術報告 人文』(46), 1–28.
- 山口美知代 (1998) 自由間接話法と情報の伝達構造: 話法・引用の対照研究のために.『京都府立大学学術報告. 人文・社会』(50), 61–74.
- 湯浅英男 (2015) 日本語において「間接話法」はいかに規定されるべきか—夏目漱石の『坊ちゃん』を例文に用いて—.『近代』(113), 19–47.
- 湯浅英男 (2017) 近代小説の「話法」に関する一考察: 樋口一葉の『にごりえ』の例文などを用いて.『近代』(116), 1–25.